

3月28日野生の4羽 北帰行 3月21日放鳥ツル 1羽北帰行?

こ れまでで最も遅い3月28日8時48分、農作業が始まったのを気にしてが、いつもより早い時刻に野生のツル4羽がシベリアへ向けて飛び立ちました。今年度も暖冬により渡去時の天候が不安定で、旅立ちも昔に比べるとずいぶん遅くなりました。無事に帰り、この10月にはもっと多くの仲間を連れて渡来する事を願っています。

また、過去2回の放鳥ツルは野生のツルと一緒に帰らず戻って来ましたが、今年度は野生のツルが戻り、放鳥ツルは戻らず渡去したようです。この秋無事な姿を見せてほしいものです。

今年度は渡来も全体的に遅かったのでまとめておきます。10月31日つがい2羽、11月14日親子4羽の1家族と成鳥1羽の5羽、これは先着の2羽に追われて5日間で飛去してしまいました。そして最近では珍しく、2月4日につがいの2羽が渡来してやっと4羽になりました。11月26日に放した放鳥ツルもこの2羽と仲良く行動を共にし助かりました。

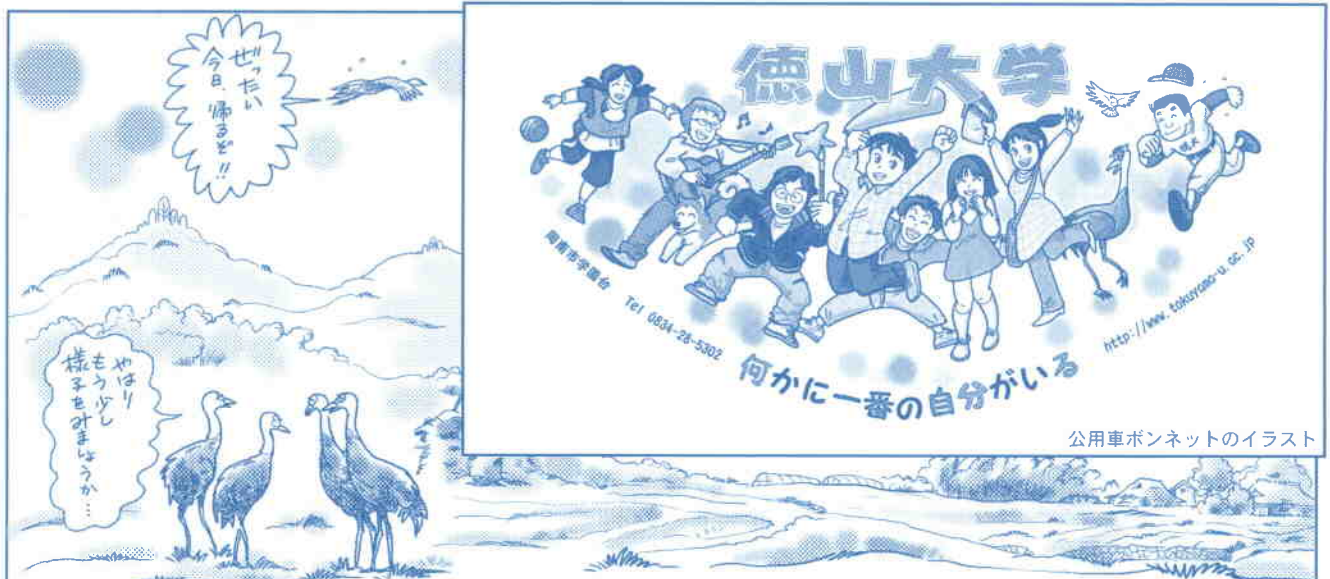
岡南市ツル保護研究員 河村宜樹



北帰行した4羽

6・6〇・9〇6・6・6〇・96・6〇・9〇6・6・6〇・96・6〇・9〇6・6・6〇・96・6〇・9〇6・6・6〇・9

漫画家 **なかはらかせさん** から 八代へのメッセージ! No.11



公用車ボンネットのイラスト

徳山大学入学式のご来賓挨拶のなかで、島津岡南市市長は八代のナベツルの北帰行をたとえに新入学生にエールをおくられた。

単独で北を目指した放鳥ツル、弱いツルをかばうように慎重に北帰行した4羽の野ツルたち…、そう、ツルにも人にも個性がありキャラクターがある。それぞれの考え方、生き方があるのだと考えさせられた。

市長の公用車のボンネットに徳山大学のイラストを描かせてもらった。そのイラストには元気のいい徳大生と一緒に、実は一羽のナベツルがいる。若者たちも、そしてツルたちにも、自由なつばさで、岡南市をフィールドに元気に頑張れと、ささやかにボクもエールをおくらせてもらった。

ツル放鳥 特集



保護ツル放鳥から 北帰行まで

(保護ツル3羽の今後も含めて)

ツル保護事業の行方は?

保護ツル移送・飼育・放鳥に関する事業も3年目を迎えている。普通なら3年やればある程度の方向性は見えてくるのが普通であるが、この事業に関しては、暗礁に乗り上げているというのが本音であろうか

少し過去の取り組みを振り返って見ると、まず移送事業、H18年2月、H20年5月、H21年4月と時期が3通りあるが、どれも無事に移送することができた。3羽、2羽、4羽の合計9羽である。440kmをほぼ6時間半かけて、移送してきた。羽数にもよるが、安全に運んでいる。

次に飼育事業について、1年目が12ヶ月、2年目が7ヶ月、3年目も7ヶ月という飼育期間になる。ツル保護センターが未完成ということで、別の場所に移したり、再移送したり、手間がかかっていたが、平成20年度で施設がやっと完成した。今後は順調に飼育ができる環境になったといえる。飼育員のレベルも高い、その観察力も向上し、ツルの状態も見極めながら、日々の観察に努力していただいている。感謝である。

ただ、問題はいろいろある。羽の欠損、鳥インフル問題、餌の問題などやればやるほど課題は出てくる。かなり緻密な飼育データが蓄積されている。これは世界にも類をみない貴重なデータである。今後このデータをきちんと分析していく必要がある。

次に放鳥事業である。1年目が3月3日、2年目が12月21日、3年目が11月26日と次第に早くなっている。それは八代への馴化や渡来ツルとのコミュニケーション

の問題である。放鳥ツルがいかに早く八代の環境に馴染んでいくのかという問題である。意外なことに八代のネグラを覚えるのも早い段階で覚えているし、八代の渡来ツルとも馴染むのも比較的早いのではないかと思う。ただ、北帰行の際にその実態が出てくる。まだ一度も渡来ツルについてシベリアまで行っていないという事実である。

一緒に飛び立っているのに途中で引き返したり、勝手に戻ったりしている。なにが原因なのかは未だわからない。想像の域を出ていない。

平成20年度について、すこし見てみよう。11月26日オープンケージの扉を開けた。しかしながらすぐには出ない。6日間を要してやっと自らケージを出て行った。慎重な行動である。その用心深さを感じる。しばらく仲間の3羽に拘る行動を起こす、3羽とは4月から11月まで7ヶ月間一緒に過ごしていたのであるから無理はない。次第に自分の置かれている現状に気づいてくる。今までどおり朝起きれば、餌が勝手にやってくる。そんな状況にないことに気づき、自分で餌を探し始め、自由に移動しようとする、なぜか違う仲間がいて、なぜか自分を追ってくる。しかたなく、端の方に追われていき、やっと自分の置かれている状況に気づく、その安全地帯としていた囲い込みの中で大半を過ごすことになる。ある日、5羽のツルがやってくる。その5羽も追われている。そして、5日目に逃避行してしまう。そして、今度は2羽がやってきた。放鳥ツルはこの2羽と行動を共にすることを決意し、ネグラにも一緒にいくようになる。煙たがれてもしつこく付いていくことを決断し、かならず行動を共にするようになる。しかたないかのように2羽も次第にあきらめ、許してしまう。そんな行動の中で3月に入り、中ほどに移動し始める。追われなくなり、やっと5羽が同じ田んぼにいる日々が増えてきた。

そして、3月21日を迎える。朝から霧囲気はあった。朝冷え込み、9時過ぎて温度はどんどん上がり、5羽

は近くの田んぼで餌をついばんでいる。

放鳥ツルのP46はやる気満々である。そして、9時30分、一番最初のきっかけはやはりP46であった。飛び出したと同時に他の4羽も舞い上がる。すこし低めに飛び出し、監視所の周辺をぐるっと回って西に方向を定めた。「よし!行った」だれしも疑わないが、しかし、去年のことがある。30分では安心できない。でも視界から消えた。



1度は5羽で飛び立ったツル

心で「行け!行ってくれ!」と叫んでいた。そして、TVカメラは河村研究員へそのレンズが集まっていた。私はあちこちに電話を掛け始めた。「9:30八代を飛び立ちました。追跡をお願いします」

しかし、やはりサプライズが起こった。飼育員の一人が「帰ってきている!」と小さく叫んだ。「えっ!どこ?」確かにツルの陰影が遠くに見える。1羽、2羽、3羽、4羽・・・えっ!4羽しかいない。そんなはずはない。まさか放鳥ツルが・・・まさに絶句である。今度は放鳥ツルだけ行って4羽が帰ってきた。昨年とまったく逆のパターンである。なんということだ。言葉がない・・・。

3月28日(土)8:48 4羽が前触れもなく、飛び立ったという。天気は曇り、いつものように朝の冷え込みもなく、放射冷却現象もなかったし、だれもが今日の北帰行はないなという確信にも似たような雰囲気の中、4羽は送られる人も少なく、静かに八代を飛び立った。記録史上もっとも遅い北帰行となった。八代は彼らにとっていつまでも第2の故郷であって欲しいと願いつつ、無事に北帰行し、元気な子どもを連れて八代に戻ってきて欲しい。

(残された3羽について)

3羽はやはり北帰行の時期を認識している。3月21日5羽が飛び立ったその日は、落ち着かない様子でケージの中でそわそわしていたという。その時期を知っているのである。

ただ、彼らはまた1年ここで過ごさなければならない運命にある。それも確証ではなく、未確定な状況の中で飼育が継続されることになっている。なぜ残っているのか?それは羽の欠損である。ツルは初列風切羽が10枚、次列風切羽が15枚とその重要な羽の一部が傷ついたままで癒されていない。そのため放鳥ができなかった3羽である。いつ生えかわるのか、ナベツルのデータはない。それが現実である。6月から飼育員により羽の欠損調査が始まった。毎日欠損した羽を集め、一日ごとに整理してもらったその結果、2月中旬までに1200枚もの羽の抜けがわかった。しかし、重要な羽である、初列と次列の羽が抜けていない。唯一1羽の次列が1枚抜けていたのみである。改善されていないということで放鳥は見送られた。この3羽は今後生えかわりがあるまで、観察が続く、いったいつ抜けるのか、これが3羽の運命を決する。今後経過については別に報告することになる。



健全なツルの羽



羽の欠損例

周南市教育委員会 生涯学習課
鶴担当主幹 徳永 豊